様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ５ 月 ２７ 日現在

機関番号：１４１０１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2011～2013
課題番号：２３７２０４０８

研究課題名（和文）都市のシティズンシップに関する地理学的研究―ミラノ・社会センターの空間的実践―

研究課題名（英文）Geographies on Urban Citizenship: Spatial Practices of Social Centers in Milan

研究代表者
北川　眞也（KITAGAWA, Shinya）

三重大学・人文学部・准教授

研究者番号：１０５１５４４８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　2,800,000円、（間接経費）　840,000円

研究成果の概要（和文）：ミラノの社会センターは、「不法占拠」空間であっても、社会的なものから隔絶されてはいないことが明らかとなった。むしろ、外部（地区や都市）への開放性を創出してきたからこそ、この空間を存続させられた。そこでは、「地域（領域）territorio」という概念に非常に重要な価値が置かれてきた。かれらは、既存の制度とは徹底して異なり、それとは衝突するような目線で、地域と住民を研究し描写すること、さらには住民を自らの実践に巻き込むことで、いわば別の地域、別の社会を構築していく知恵を具体化してきた。ここから、「地域（領域）」の概念を基盤にして、住民との、住民同士の民主的協働を形成する可能性を指摘できた。

研究成果の概要（英文）：We cleared that social centers in Milan, even if being 'illegal' because of squatted spaces, are not isolated from the social. Rather, they have attempted to create openness to the outside like neighborhoods and cities with each specific mode and have succeeded in making these spaces continue to exist. For doing such practices, activists of the social centers have attached greater importance to the concept of 'territory (territorio)'. They have concretized ideas to create alternative territory and society, doing research and describing territories and inhabitants from the point of view, from the below, which is radically different from that of institutional and administrative power and is in tension with it, and then involving local people in their practices. We pointed out the possibility of democratic cooperation with inhabitants or among them on the basis of the idea of territory.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：人文地理学

キーワード：ミラノ　イタリア　都市　自律性　社会空間　社会運動　地理学　地域

１．研究開始当初の背景

福祉国家の危機、社会の危機の渦中から、日常生活の場たる都市というスケールで、自発的な協働を通して、社会関係そのものを新たに創出する動きがみられるようになった。実際、昨今の地理学を含む都市研究においては、ネオリベラル都市がもたらした社会関係の喪失、格差の増大といった帰結から、コミュニティ再生・社会包摂・多文化共生など、現場の人々の協働と連帯を通して社会関係自体を新たに再生する実践の分析・検証へと関心のシフトもみられつつある。

これは空洞化したシティズンシップの実質を、都市生活のただ中から刷新する試みであり、都市におけるシティズンシップの実践と呼べる。この実践は、概して既存の制度的枠組みとの交渉・コンフリクトを経験するが、こうした過程を通してこそ、新たな制度の形式が、この実践に具体的に与えられる。グローバル都市論も明らかにしたように、世界経済の物質的基盤が、国家から都市へと移行した（サッセン2008）ならば、政治制度もこの現実への対応を迫られる（Purcell 2003）。そこで、国家領域へと収斂してきたシティズンシップという制度が、「上から」の制度改革のみならず、日常生活の現場たる都市での「下から」の社会的協働を通して再編成されていく過程を、理論面のみならず、実証的・経験的レヴェルから検討・分析することが求められると考える。

【参考文献】

サッセン, S. (2008)『グローバル・シティ――ニューヨーク・ロンドン・東京から世界を読む』（伊豫谷登士翁・大井由紀・高橋華生子訳）筑摩書房.

Purcell, M. 2003. Citizenship and the right to the global city: reimagining the capitalist world order. *International Journal of Urban and Regional Research* 27, pp. 564-590.

２．研究の目的

本研究の目的は、物理的空間を基礎に社会関係を創出してきたイタリア・ミラノの「社会センター」に着目し、都市のシティズンシップをめぐる社会的・政治的過程を明らかにすることである。

イタリア諸都市に存在する社会センター centri sociali とは、既存の制度の外部で、自発的に生まれた社会空間である。福祉国家が危機に陥る1970 年代後半から出現し、90 年代に広がりをみせた社会センターの特徴は、若い労働者や失業者、政治活動家たちが、脱工業化する都市空間に残存する工場跡地や未使用のビルなどを占拠し、その空間をインフォーマルに活用することで、近隣地区や都市の抱える様々な緊急の社会的・文化的ニーズに応答するべく出現した。行政サービスや市場によっては充当されなかったサービスを、非営利目的の自主管理という相互扶助を通した自らの力量で実現してきた。その活動は、子守り、ホームレスへの食事提供、移民への避難所提供や語学教室などの社会活動、演劇・映画・音楽のイベント、カフェやバーの運営、図書館や書店の設置の文化活動、さらにはデモへの動員や情報の流布といった政治活動など多岐に及ぶ。

本研究では、活動の範囲・種類も空間の大きさも、イタリア最大規模の社会センターであるミラノの「レオンカヴァッロ」を研究対象としてひとまず設定した。その場所における、その場所からの多様な社会的・文化的・政治的活動を、シティズンシップの実質的実践として分析する。また市行政との関係（交渉・軋轢）を明らかにすることで、都市のシティズンシップの形式化をめぐる過程を検証する。

３．研究の方法

まず述べたいのは、調査過程において、研究の対象に変化・広がりがみられたことである。当初はミラノの社会センターとして、「レオンカヴァッロ」を集中的に研究する予定であったが、文字資料調査やインタビュー調査の進展に伴い、インフォーマントのネットワークを通して、その他の社会センターについても調査することができた。具体的には、文字資料の調査で頻繁に訪問した「コックス18」、「ピアノテッラ」、ミラノ郊外（ロー市）の「フォルナーチェ」である。

研究方法は、社会センター自身が作成している膨大な文書資料（報告書、ビラ、ポスター、管理運営の模様を示す記録、自主研究など）の収集・分析、プリーモ・モローニ・アーカイヴにおけるミラノの社会センターに関連する歴史的資料の収集・分析、社会センターの当事者たちへのインテンシブなインタビュー調査、またライフヒストリー調査、そしてミラノ市立図書館で社会センターについて報じた新聞記事の収集・分析からなる。

４．研究成果

研究成果は、次の 5 つに分けられる。⑴ミラノの社会センター運動の歴史的・政治的文脈、⑵「レオンカヴァッロ」の歴史的変遷、⑶「フォルナーチェ」の社会空間史、⑷反万博・反ジェントリフィケーション運動、⑸「コックス 18」の社会空間史についての研究であ

る。

⑴ミラノの社会センター運動の歴史的・政治的文脈

アウトノミアと呼ばれた議会外左翼運動など、社会センターの創出・運動に関係してきた当事者・集団の発行してきた資料、そしてかれらについて報道するイタリアの主要新聞の分析から、ミラノの社会センターの歴史的・政治的文脈について明らかとなったのは、これらの運動が、伝統的な闘争の場とされた工場にとどまらず、むしろ明確かつ積極的に都市を重要な場としてみなしていたことである。そこにおいて、様々な空間的実践、例えば、居住のため、文化・社会的・政治活動のためのスクウォットが展開されてきた。また、それにはこの時期に、ミラノが工場を中心とした都市から、ポスト工場都市へと移行しはじめたことが関係していた。この移行は、都市の中の労働者地区が解体されていくことを意味していたからであった。この解体に抗い、共にいること、近くに一緒にいることが、非常に重要な価値をもつようになった。それが社会センターのように一つの空間に共にいることであった。またそれにとどまらず、非常に重要なことに、社会センターの位置する「地区」の住民たちをできる限り、この空間の活動に関与させること、いわば地区に根付くことにもまた確固たる社会的・政治的意味が与えられていたことが明らかとなった。

⑵「レオンカヴァッロ」の歴史的変遷

⑴の結果を受けて、レオンカヴァッロの歴史的変遷を、この空間の外部（都市、地区）への開放と内部への閉止という観点から分析をした。特に指摘すべきは、法的には不安定性を強いられるこうしたスクウォット空間は、地区・都市への開放、様々な人びとがこの空間に来る、利用する、運営することによってこそ維持される、また有用たりうるというかれらの態度であった。レオンカヴァッロは、様々な社会的サービス、社会的弱者への支援を提供するとはいえ、それは国家や行政がこうした領域から撤退した後の穴埋めをしているわけではなかった。むしろ、たえず国家・行政といった制度からは距離をとりながら、さらには敵対しながら、自律的にこの空間を管理運営し、そこで活動を行い続けることが重視されていた。「社会的敵対」を通して、何よりも別の社会をつくり出すことが目指されていることが明らかとなった。

⑶「フォルナーチェ」の社会空間史

⑴と⑵の内容は、ミラノの都市部よりも郊外において、より切迫して、より困難なかたちで、問われ、生きられていた。ミラノ郊外に位置するローマ市にある社会センター「フォルナーチェ」は、こうした場所・状況において活動していた。自主管理者たちへのインタビュー調査からは、若者にとっては娯楽もなく、仕事も十分ではないこの場所では、管理運営自体、さらにはこの空間を存続させること自体が非常に困難なものであった。例えば、ミラノとは違い、ローにおいては、このような場所がほとんど存在しないため、自主管理者たちの間の政治的立場の違いを理由に分裂することができない。イデオロギーや思想は異なっても、郊外においては、かれらはまとまるしかない。そこでかれらがあげていた接着剤が、「地域（領域）territorio」という概念であった。かれらの言説では、この用語が頻繁に用いられているが、それはまさしく社会センターを外部に開こうとする試みであった。この territorio という概念は、⑴の1970年代の運動・実践との関わりのなかで、イタリアの地理学者ジュゼッペ・デマッテイスや地理学にも近い位置にいたアルベルト・マニャーギらによって理論的に練り上げられたものであった。しかし、この territorio をめぐる実践と理論の間の関係は、現在においては、それほど十分には展開されているようには思われない。だが、少なくともフォルナーチェの試みは、実践レヴェルにおいて territorio への介入、territorio の創出を重視しているのだと言えよう。

⑷反万博・反ジェントリフィケーション運動

⑶の「地域（領域）territorio」をめぐる外部への開放という課題は、現在、反万博、あるいは反ジェントリフィケーションというかたちで主に取り組まれている。先ほどの「フォルナーチェ」と、ミラノの労働者地区であったイゾラに位置するスクウォット空間「ピアノテッラ」は、反万博運動の拠点となっていることがわかった。2015年のミラノ万国博覧会に伴い、ミラノ、そしてその会場となる郊外では、大規模な都市空間の改変、いわばジェントリフィケーションがすすんでいる途中である。万博よりも以前ではあるが、ミラノの新たな見本市会場が、ローに建設されている。かれらは万博や見本市といったグローバルなイベントが、いかなる影響を territorio に与えるのかを調査・分析し、そのような地域の姿を描いてきた。万博や見本市という大規模事業を、徹底してローカルなレヴェル、住民の日常生活へと翻訳する。万博は、交通、

鉄道、道路、労働、環境悪化、ゴミをめぐる問いとして現れる。かれらは、下からの目線で、地域を描き、外部の住民へと伝える活動をしていた。その成果もあり、鉄道会社によって大幅に減らされた一日あたりの電車の本数を是正することに成功している。ここからジェントリフィケーションへの抗争において、「地域（領域）」の概念が有する動員力、さらには住民の民主的協働の形成において、それが有する可能性を指摘できよう。

⑸「コックス 18」の社会空間史

「コックス 18」は 1970 年代から存続する歴史的な社会センターであり、それゆえに行政とは長きに渡って緊張関係にある。この空間がこれほど長い間存在し続けている理由について調査・考察した。ひとつはここでも地区との関係性、近隣住民との関係性にあった。たとえ「不法」な場所であっても、様々な社会活動（ストリートの文化人であったプリーモ・モローニの書店とアーカイヴ、教育への関わり、文化イベントなど）を通じて、徐々に一定の支持を得られるようになった。しかし、この地区（ティチネーゼ）は、「ファショナルブル」な地区として、ジェントリフィケーションがすすんできたこともあり、コックス 18 を取り囲む状況は 1990 年代から変化してきた。こうした状況下において、実際に強制排除も幾度か経験している。ここにおいて、もうひとつの重要な存在理由が見出された。それは、市行政などと様々な法的闘争を行ってきたが、自らの存在の正当性を主張するための言説の構築であった。その戦略として、昨今においては、取得時効 usucapione に訴えることで、自らの正当性を主張していることがわかった。

以上の 5 つの成果から、「不法占拠」といわれるスクウォット空間は、それ自体で閉じたもの、社会から隔絶されたものではないことが明らかとなった。それぞれの状況のなかで、それぞれのやり方で、外部への開放性、地区や都市への開放性を創出しているし、またそうであるからこそ、この空間を存在し続けられるというわけであった。その意味では、非常にローカルなものであり、地域的なものであった。しかし、それは常に既存の諸制度との緊張状態、敵対状態のなかに位置しているものであった。行政に左右されるのではなく、あくまでも自律的に物事を決定するため、社会センターそれ自体、さらには地域のことについても自律的に決定し行動するためであった。

すでに言及したように、こうした過程では territorio という概念が社会的・政治的に重要な意味を有していた。地域を描く、地域住民の日常生活を描く、さらにはかれらを巻き込んで、いわば別の地域を構築していくというものであった。この概念の現在性については、これまでの地理学の議論と重ねて、さらに検討していく必要性があろう。

最後ではあるが、本究課題で用いたシティズンシップという言葉は、当事者たちによってはほとんど用いられていなかった。かれらの活動を、従来のシティズンシップを再構成する実践として学術的に位置づけることもできるだろうが、かれらの思想・活動、そしてそれらが位置する分厚い歴史の蓄積から、自律性という言葉が非常に重視されていたため、それをより優先的に検討している。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１件）

①北川眞也、イタリア・ミラノにおける社会センターという自律空間の創造――社会的包摂と自律性の間で、都市文化研究，査読有、第 14 号，2012、pp. 12–25.

〔学会発表〕（計７件）

① 北川眞也「都市への権利の視角――イタリア・アウトノミア運動の意義」，社会文化学会全国大会（コープあいち「生活文化会館」），2013 年 12 月 8 日。

② Shinya KITAGAWA, ‘Localizing Expo and Globalizing NoExpo?: Potentiality of a geographical/territorial perspective in Milanese Social Movements’, International Geographical Union (IGU) Kyoto Regional Conference, Kyoto International Conference Center, Kyoto (Japan), 6th August 2013.

③ 北川眞也「都市文化としてのイタリア・アウトノミア運動――ミラノにおける社会センター運動を中心に」，社会文化学会中部部会（日本福祉大学），2013 年 6 月 16 日。

④ Shinya KITAGAWA, ‘Spatial Practices in Italian Autonomist Movements: “Taking over the City” by Milanese Social Centers’, 32nd International Geographical Congress Cologne 2012, University of Cologne, Cologne (Germany), 27th August 2012.

⑤ Shinya KITAGAWA, 'A Genealogy of the Occupy Movement: Spatial Practices of the Young Proletarians in Milan in 1970s', International Workshop on Urban Utopianism cum China-India Forum on Beyond Gentrification, Hong Kong (China), 16th May 2012.

⑥ **北川眞也「例外状態に抗する自律空間の潜勢力——イタリア・ミラノにおける社会センターというスクウォット空間」, 大阪市立大学都市研究プラザ G-COE 特別研究員（若手）研究会（合評会）（大阪市立大学），2012 年 3 月 27 日。**

⑦ Shinya KITAGAWA, 'Searching for an Alternative Social Space in the City: Some Aspects of Spatial Practices of a Social Center "Leoncavallo" in Milan', International Workshop Urban Utopianism, Hong Kong Baptist University, Hong Kong (China), 14th May 2011.

６．研究組織

(1)研究代表者

北川　眞也（KITAGAWA, Shinya）
三重大学・人文学部・准教授
研究者番号：10515448

(2)研究分担者

(　　)

研究者番号：

(3)連携研究者

(　　)

研究者番号：